

小学校 社会

社会的事象を多面的にとらえる力を高める社会科指導の工夫
— 関連付けて考える場を取り入れた指導を通して —

義務教育課 研究員 澁谷 隆行

要 旨

本研究は、社会的事象を多面的にとらえる力を高める社会科指導の工夫について検証したものである。身近な地域素材を教材化した体験的な学習の展開、知識の構造化、ウェビングの効果的な活用、集団思考をする場の設定などの手だてをもとに関連付けて考える場を取り入れた指導を継続した結果、学習後において、児童は、学習前よりも事実や事象を相互に関連付けて考え、社会的事象をより多面的にとらえられるようになった。

キーワード：小学校 社会科 関連 地域素材の教材化 知識の構造化 ウェビング

I 主題設定の理由

小学校学習指導要領解説社会編には、断片的な知識を網羅的に覚えるだけの授業ではなく、具体的な活動を通して、社会的事象について考えたり、自分の意見を述べたりする授業へ転換しなければならないということが述べられている。また、OECD生徒の学習到達度調査、平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査、平成18年度及び平成19年度学習状況調査（青森県教育委員会）などのいくつかの調査結果から、これからの社会科の授業においては、特に、「社会的な思考力・判断力」と「観察・資料活用の技能・表現能力」を育成していかなければいけないことが明らかになった。

これまで自分が実践してきた授業を振り返ってみると、児童が興味や関心を持ち、主体的に学ぶことができるように、問題解決的な学習や体験的な学習を進めたり、できる限り地域の素材を教材化し、地域学習を進めたりしてきた。その結果、授業の中で、児童が意欲的に調べたり、進んで発表したりするなどの態度が見られた。しかし、発表内容のほとんどが、資料等に書かれてある事実等から考えただけの内容であった。このことから、資料等から読み取った事実を関連付ける指導や思考力・判断力を高める指導が不十分だったのではないかと考えた。

これらの反省を生かして、「社会的な思考力・判断力」を育てるために、知識を網羅的に覚えさせるのではなく、事実や事象を相互に関連付けながら、社会的事象にはどのような特色があるのか、その特色が見られるのはなぜかを追究し、それらを関連性のある知識としてとらえさせる指導や獲得した知識を根拠として自分の考えをもたせる指導が必要であると考えた。また、事実や事象を相互に関連付けるためには、それらを正確に抽出することが前提であるため、教師が作成した読み物資料の活用を通して、「観察・資料活用の技能・表現能力」も育成していきたいと考えた。

そこで、研究主題を、「社会的事象を多面的にとらえる力を高める社会科指導の工夫」、副題を「関連付けて考える場を取り入れた指導を通して」と設定し、研究を進めていくことにした。

II 研究の目標

社会科の学習において、社会的事象を多面的にとらえる力を高めるために、身近な地域素材を教材化した体験的な学習の展開、知識の構造化、ウェビングの効果的な活用、個人で関連付けた内容をもとに集団思考をする場の設定などの手だてをとることが有効であることを実践を通して明らかにする。

III 研究の仮説

社会科の学習において、特に次の手だてをとれば、社会的事象を多面的にとらえる力が高まるであろう。

- ・児童が興味や関心及び問題意識を高め、実感を伴いながら社会的事象をとらえることができるように、身近な地域素材を教材化した体験的な学習を展開する。また、社会的事象の認識がより深まるように、

地域学習で獲得した成果を一般的事象へ転移させる。

- ・ 社会的事象の相互の因果関係や社会的事象のもつ法則性をとらえることができるように、知識の構造化を図る。
- ・ 調べた事実や事象及び自分の思いや考えなどを相互に関連付けながら、社会的事象の意味をとらえることができるように、ウェビングを授業に取り入れる。
- ・ 社会的事象の意味をより深くとらえることができるように、個人で関連付けた内容をもとに集団思考をする場を設定する。

IV 研究の実際とその考察

1 研究の内容

(1) 多面的にとらえる

ある社会的事象にはどのような特色があるのか、その特色が見られるのはなぜなのか（因果関係）を追究し、それらを関連性のある知識としてとらえること。

(2) 関連付ける

社会的事象をとらえるために、抽出した事実や事象を相互にかかわらせたり、既習の知識を転移・応用して考えたりすること。

(3) 身近な地域素材を教材化した体験的な学習

以下の4点は、身近な地域素材を教材化し、体験的な学習を行うときの有効性についてまとめたものである。

- ① 身近な地域を対象とするため、自分自身や自分の生活と関連付けて考えることができる。
- ② 身近な社会的事象を対象とするため、興味や関心及び問題意識をもちながら学ぶことができる。
- ③ 身近な社会的事象を対象とし、さらに体験的に学べるため、実感を伴いながら知識を獲得していくことができる。
- ④ 地域学習で獲得した成果を一般化することにより、社会認識の深化と統合を図ることができる。

実際の授業においては、地域素材を教材化し、それらをもとに作成した読み物資料を活用する。また、観察や調査・見学などの活動では、事前に実地踏査や担当者との綿密な打ち合わせを行い、児童が聞き取り調査をしたり、具体物に直接ふれたりすることができるようにする。

このような身近な地域素材を教材化した体験的な学習を展開することにより、児童の生活経験や学習経験に関係のない内容をもとにした学習よりも、児童の興味や関心及び問題意識を高め、実感を伴って社会的事象をとらえさせることができると考えた。

表1 地域素材の教材化の視点をもとにした素材分析

| | 直接性 | 地域性(特殊性) | 一般性 | 社会性 | 具体性 |
|---------------|----------------|---------------------|----------------------------|---------------------|---|
| | 直接見聞き可能なものか | 地域で特有なものか | 他地域との共通性があるものか | 児童の生活経験とむすびついているものか | 事象を明確に示すものか |
| 鱈ヶ沢港の歴史(藩政時代) | A(解説員・実物・資料) | A(藩政時代は、漁港として栄えていた) | A(北前船・上方との商業の交流) | D | A(船絵馬・玉垣、当時の写真、鱈ヶ沢町史、漁港、魚介類、漁船、漁師、統計資料) |
| 鱈ヶ沢町の水産業 | A(漁業関係者・実物・資料) | A(現在も漁業がさかん) | A(同じような課題や課題解決のための取組をしている) | B | A(漁港、イカ、漁船、漁業関係者、イカの販売店、統計資料) |
| 金あゆ | A(漁業関係者・釣り人) | A(全国的にも有名) | B | A(釣る・食べる) | A(アユ、養殖場、資料) |
| 白神山地 | B | B | A(食物連鎖・環境) | C | A(ブナの森、赤石川など) |
| 大浦光信公 | C | A(唯一有名な武士) | B | D | C(館の資料、鱈ヶ沢町史) |
| 幻の魚イトウ | A(漁業関係者・実物) | A(全国的にも有名) | C | C | A(イトウ、養殖場、資料) |
| 北限の天然杉 | A(解説員・実物) | B | C | D | A(天然杉と人工杉) |
| 板碑 | A(解説員・実物) | B | A(様々な地域にある) | D | A(板碑) |
| 獅子舞 | B | A(町で唯一の獅子舞) | A(様々な地域にある) | C | A(獅子舞) |

A…とてもよく当てはまる B…だいたい当てはまる C…あまり当てはまらない D…ほとんど当てはまらない

上記の表1のように素材分析をし、どのような素材を教材化すればいいのかを検討することにした。検討の観点は、直接性、地域性(特殊性)、一般性、社会性、具体性とし、それらをもとに鱈ヶ沢町の九つの地域素材が、それぞれの観点の内容に当てはまるかどうかを分析した。素材分析の結果、「鱈ヶ沢港の歴史」と「鱈ヶ沢町の水産業」と「金あゆ」に対する評価がよかった。この中で、「金あゆ」は、既に原籍校の総合的な学習の時間の内容になっているため、教材化の対象から外すことにした。残りの二つの素材を比べた結果、児童の生活とかかわりが強いのは「水産業」であると考えたため、検証授業では「鱈ヶ沢町の水産業」を教材化した授業を行うことにした。

(4) 知識の構造化

今、社会科では、断片的な知識を網羅的に獲得する授業ではなく、「社会的な思考力・判断力」を育てる授業が求められているが、これらの力を育てることは、「知識・理解」を否定することではなく、むしろ、知識の獲得と大きくかかわってくるものであると考える。なぜなら、「思考力・判断力」は、それ自身が単独で育つことは不可能であり、必ず何らかの事象（知識）とかかわりながら育っていくものとらえているからである。

岩田一彦は、この社会的な思考力・判断力とかかわりのある知識を分類し、構造化する必要性を述べている。そこで、岩田が述べている文献を参考にして、「知識の分類表」を図1のように作成した。下位にある知識ほど具体的であり、上位にある知識ほど抽象的である。この図の中の最上位にある知識を獲得させるためには、下位から段階的に知識を関連付けさせる必要があり、その知識の獲得の過程で、「社会的思考力・判断力」も深まっていくと考えた。また、図2は、地域教材である「鯨ヶ沢町の水産業」の内容をもとに作成した「知識の構造化一覧」である。

授業の構想としては、この構造化一覧の一番下位にある記述的知識を獲得する授業から、記述的知識を関連付けて、その上位にある分析的知識を獲得する授業への展開を考えた。そして、いくつかの分析的知識を関連付けて考えさせることにより、単元の目標である説明的知識（概念的知識）の獲得をねらうことにした。また、指導計画の中に、意志決定する場面を設定し、規範的知識の獲得にも迫らせたいと考えた。

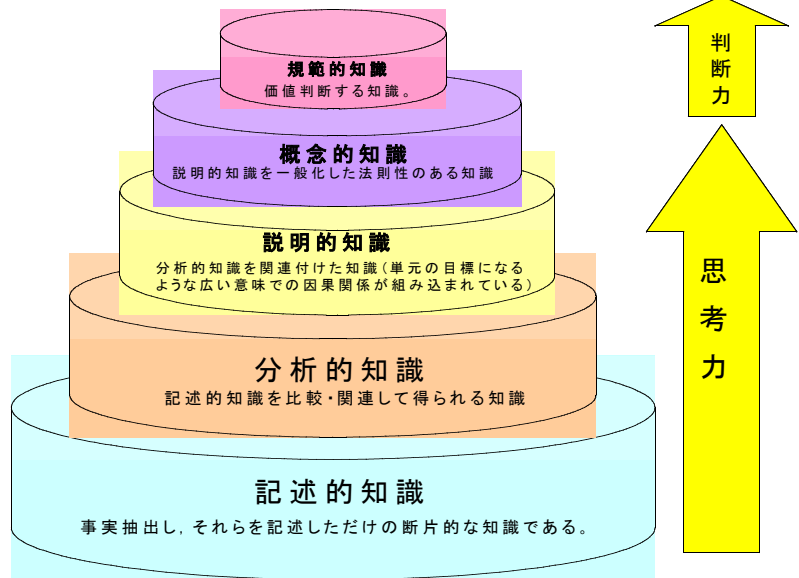


図1 知識の分類表

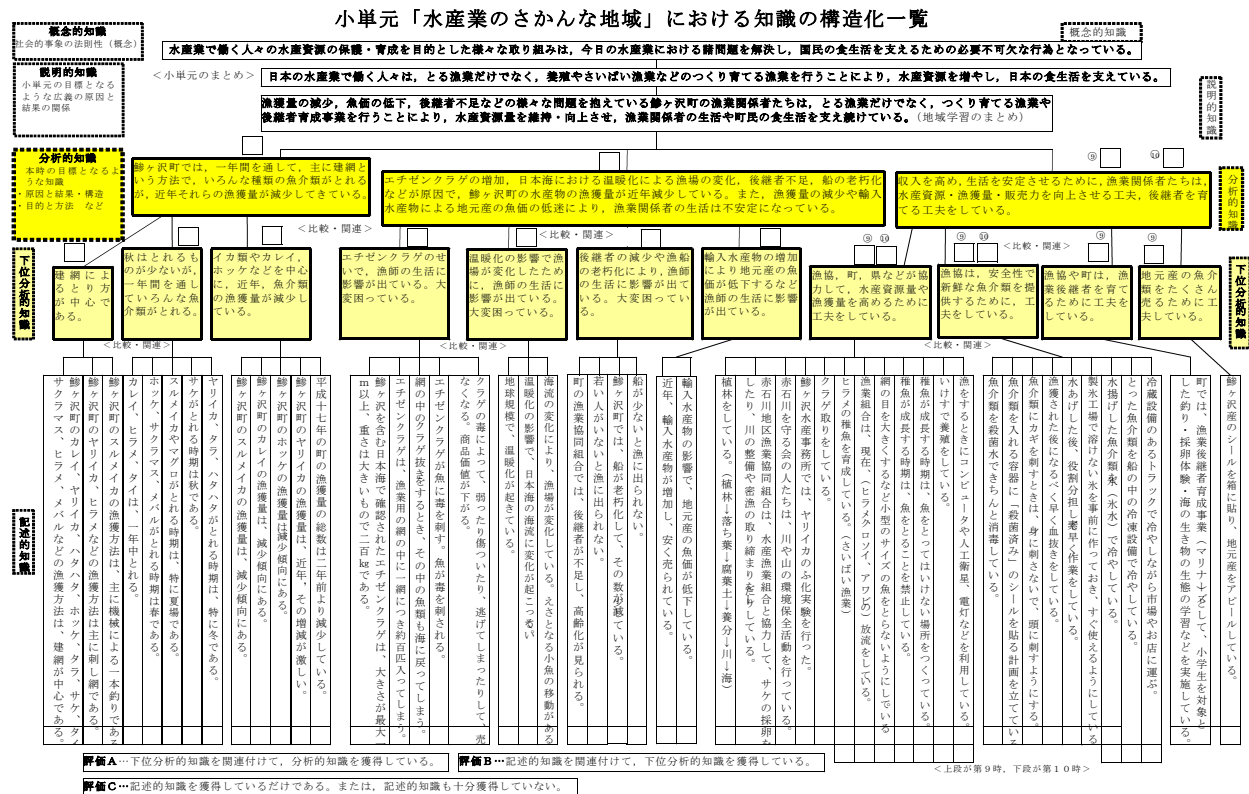


図2 知識の構造化一覧

(5) ウェビングの効果的な活用

一般にウェビングとは、主に学習課題を設定するために、蜘蛛の巣を張りめぐらす形で、一つのテーマから想起される事柄を次々と書き出していく方法である。このウェビングが、調べた事実や事象を相互に関連付けるために効果的な方法になり得るかどうか、実際に小学校社会科のいくつかの単元内容をもとに検討した。その結果、ウェビングのよさを見出すことができたので、本研究においては、ウェビングを以下のように定義付け自分の研究に取り入れることにした。

＜ウェビングの定義＞

- ① 児童の興味や関心に基づいて、調べたことや自分の思いや考えなどを関連付ける（関連付けの例は図3）など、児童一人一人の思考に寄り添いながら社会的事象の意味をとらえていく方法である。
- ② 図解することによって、学習内容の全体像が分かり、そのことにより今まで見えなかった社会的事象の関連性を見つけていく方法である。
- ③ 学習過程での教師による評価、児童のメタ認知評価に活かしていく方法である。

図2のような知識の構造化一覧をもとに自分でウェビングを作成してみた結果、記述的知識を関連付けることによって、分析的知識を獲得することが可能であることが分かった。よって、ウェビングを授業に取り入れると、知識を段階的に獲得しながら、より上位にある知識を獲得し、その結果、社会的事象の意味をとらえさせることができると考えた。

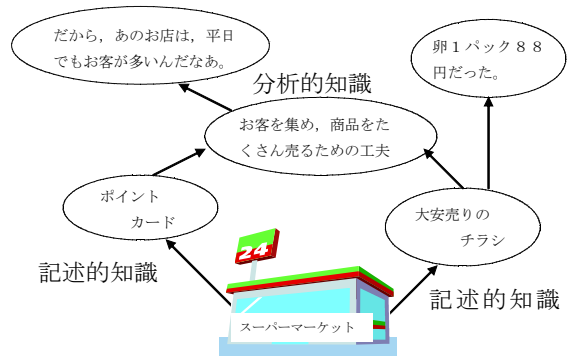


図3 ウェビングの例

(6) 個人で関連付けた内容をもとに集団思考をする場の設定

社会的事象を多面的にとらえさせるために、互いの調べや考えについて話し合わせ、集団思考をする場を設定することが有効であると考えた。そのための具体的な手だてとして、小単元を「知る→分かる→考える」の3段階で構成し、それぞれの段階に、個人での「調べ」、調べたことを関連付けた「まとめ」、まとめたことをもとにした「話し合い」の三つの活動を1サイクルとして位置付けるようにした。

このように、三つの活動を1サイクルとして位置付けることにより、①社会的事象にかかわる知識を得る、②社会的事象の相互の関連性が分かる、③社会的事象の意味が分かり次への問題意識をもつといった活動の流れがスムーズに行われ、思考力が深化される。また、互いの調べや考えを話し合う場を設定することにより、考えの再構築がなされ、社会的事象の意味をより深くとらえさせることができると考えた。

2 検証授業

(1) 小単元の構成について

小単元の授業の流れ（図4）を以下のように設定した。

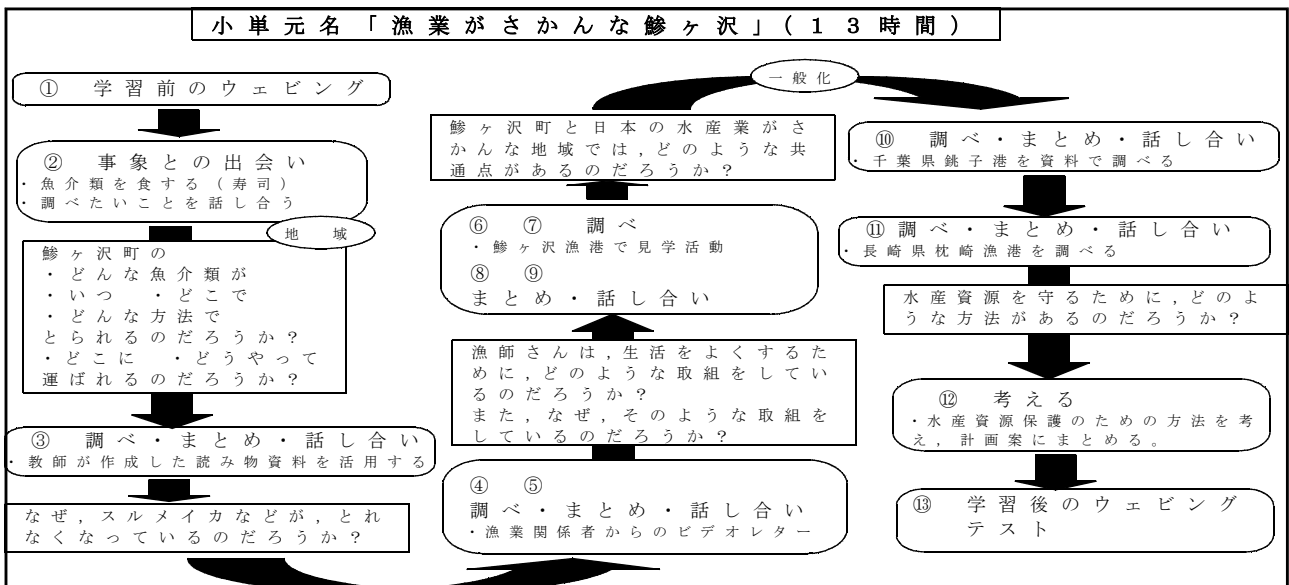


図4 小単元「漁業がさかんな鯉ヶ沢」の授業の流れの構成図

小単元の目標

- ・200海里漁業専管水域の制定、乱獲、地球温暖化などの影響で日本の漁獲量及び漁獲金額が減少しているが、水産業にかかわる人々が、安全と新鮮さに気を配りながら水産資源の保護・育成などの様々な取組をすることによって、漁獲量が維持・増加され、漁業関係者の生活や国民の食生活が支えられていることが分かる。
- ・資料等から事実を正確に読み取り、読み取ったことをウェビングや話し合いを通して関連付けながら、日本の水産業に関する諸問題とその原因、漁業関係者の取組とその意義や目的について考えることができる。

(2) 検証方法について

この検証授業で目指す児童の姿と検証方法は、以下の通りである。

- ①ウェビングをさせたり、話し合いをさせたりすることにより、事実や事象及び自分の思いや考えを相互に関連付けて、より上位の知識を獲得することができる児童の育成を目指す。そのような児童が育ったかどうかは、児童が書いたウェビングを分析し、知識の構造化一覧の中のどの段階の知識まで獲得できているのかどうかを検証することにした。
- ②児童が意志決定をする場面を指導計画の中に設定することにより、獲得した知識をもとにして自分の考えをもつことができる児童の育成を目指す。そのような児童が育ったかどうかは、児童の記述や発表の内容を分析し、既習の知識から根拠を見出しながら、きちんと理由付けをして自分の考えを書いたり、発表したりしているかどうかを検証することにした。

(3) 検証授業の実際について

対象は鰯ヶ沢町立南金沢小学校第5学年である。授業の概略は以下の通りであった。

<第1時>

検証授業の前に、「日本の水産業」というテーマで、知っていることや思ったこと、考えたことを中心に児童にウェビングをさせた。授業後、全児童のウェビングを分析したところ、知識の種類という観点では、「魚を釣る、売る、買う、食べること」、「魚の種類」、総合的な学習の時間で学んでいる「サケやアユの放流とその目的」に限定されていたため、水産業にかかわる知識に乏しいことが分かった。

<第2時>

検証授業の初日は、水産業に対する問題意識を児童にもたせるために、地元の寿司屋の寿司を食べる活動を取り入れた。その際、近隣市町村の寿司ネタの大半は、地元産でないことを紹介した。その結果、児童は、自分たちが食べた寿司ネタに疑問をもった。そして、食べたスルメイカ、ヒラメ、マダイ、マグロの寿司ネタすべてが鰯ヶ沢町の近海でとれたものだということを知り、その味のよさや種類の多さにとっても驚いた。

その後の話し合いでは、児童は、鰯ヶ沢町では他にどんな魚介類がとれるのか、どの種類が一番多くとれるのか、とった後はどこへ運ばれるのかななどの疑問を次々と発表した。話し合いのまとめとして、まずは鰯ヶ沢町ではどんな魚介類が、いつ、どんな方法でとられるのかを調べていくことに決めた。

<第3時～第12時>

第3時以降は、資料を活用したり、漁業に関する施設等を見学したり、漁業関係者の話を聞いたりしながら、以下の問いに対する答えを追究していった。

- ・鰯ヶ沢町では、どんな魚介類が、いつ、どんな方法でとられるのだろうか。(第3時)
- ・なぜ、スルメイカなどが減少してきているのだろうか。(第4時～第5時)
- ・漁師さんたちは、生活を安定させるためにどのような取組をしているのだろうか。(第6時～第9時)
- ・銚子や枕崎の漁師さんたちは、どのような取組をしているのだろうか。(第10時～第11時)
- ・日本の水産資源を守るために、どのような方法があるのだろうか。(第12時)

<第13時>

まず、学習後のウェビングをさせた。児童は、この小単元全体を通して学んだことを知識を相互に関連付けながらウェビングをした。次に、学習後の感想を書かせた。最後に、各自のウェビングや学習後のまとめを話し合い活動の中で発表させ、全ての検証授業を終了した。

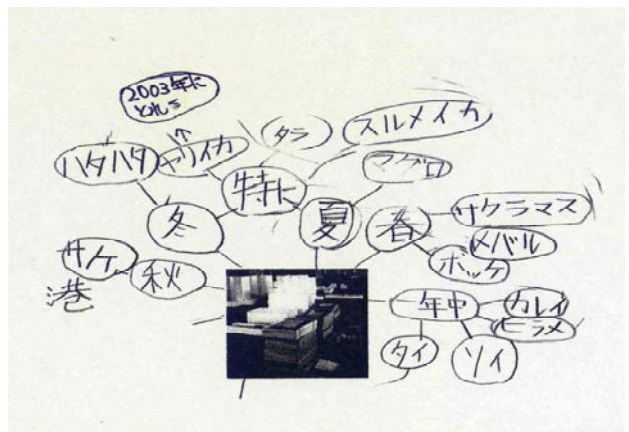


図5 第3時のウェビング

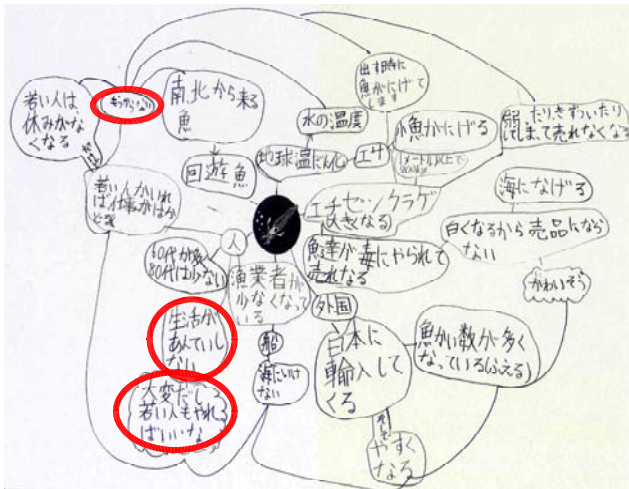


図6 第5時のウエビング

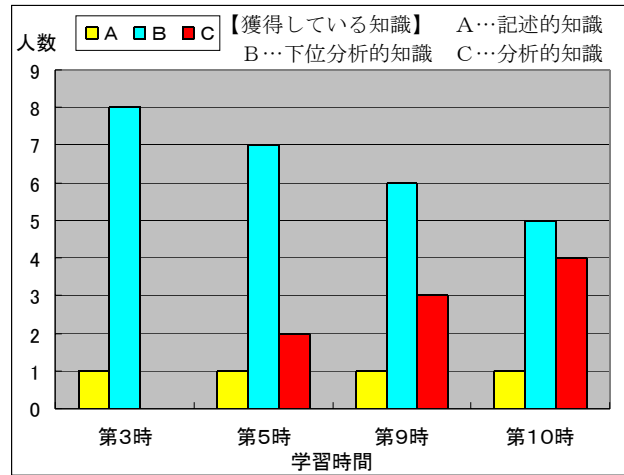


図7 学習時間ごとの知識の獲得の比較

(4) 検証授業の分析について

児童が書いたウエビングと知識の構造化一覧(図2)を比較して、ウエビングの中に、知識の構造化一覧の中のどの段階の知識まで書かれているのかを分析することにした。例えば、図5のウエビングには、知識の構造化一覧の中の記述的知識である「季節ごとに獲れる魚介類の種類」よりも上位にある知識が書かれていないので、記述的知識までしか獲得できていないと判断した。また、図6のウエビングには、知識の構造化一覧の中の分析的知識である「漁業関係者の生活の不安定さ」について書かれているので、分析的知識まで獲得できていると判断した。このようにして、第3時、第5時、第9時、第10時における全児童のウエビングを分析してみた。その結果を表したグラフが図7である。Aは記述的知識、Bは下位分析的知識、Cは分析的知識まで獲得できていることを表している。このグラフから分かることは、学習を進めるに従ってCの児童が増えてきたことである。つまり、学習を進めるに従って、記述的知識や下位分析的知識を関連付けて、分析的知識を獲得していく姿が明らかになった。

また、全児童の学習後の感想の中から、以下の児童の感想を抽出し、分析した。

| |
|--|
| ウエビングをして、エチゼンクラゲのせいで、いろいろな魚がいなくなることが分かり、それにだんだんとサクラマスがとれなくなってしまうことが分かりました。学習前は、ほとんどお店のことしかかいていなかったけど、学習後は、いろんな魚の名前が分かってきました。(X児) |
| 鱒ヶ沢漁港に見学に行って、三日間かけて、とけない氷を作るということが、びっくりしました。ほかにも、魚を新鮮に保つために、塩水につけていることや氷をトラックと船に入れるホースが二つあることも初めて分かりました。スルメイカもたくさん取れていたのに、温暖化や水温の関係や回遊魚のせいでスルメイカがとれなくなってきたことが分かりました。私たちがいつも食べている魚は、漁師さんたちが、新鮮に保つために氷を使って工夫していることが分かりました。(Y児) |
| 鱒ヶ沢漁港に行ってびっくりしたことは、こんなにいっぱいのおいしい魚があるのかということや、大きいヒラメなどがいたことなどです。ヒラメは3~4kgが一番高い。ほかにも、せんどをたもつために血ぬきをしたり、氷でひやしたりして、ねだんを高くしていることが分かりました。その氷は、空気を入れてとけにくい氷にできていて、さらにねだんが高い魚にしていました。そうやって、漁師さんたちがもうけていることが分かりました。(Z児) |

上記のX児の感想からは、学習前よりも魚の知識が増えたことや、エチゼンクラゲのせいで魚が減少したことをとらえていることが分かった。しかし、他の減少理由が書かれていないこと、漁業関係者の工夫については全く書かれていないことなどから、記述的知識までしか獲得できていないと考えた。

また、Y児は漁師たちの工夫をいくつか関連付けて、それらは新鮮さを保つためにしていることなんだということを書いていた。このことから、Y児は、下位分析的知識を獲得していると考えた。また、「自分たちがいつも食べている魚は…」などのように、自分の生活とかかわらせて書いていることも分かった。しかし、その取組の背後にある漁業関係者の思いや願いなどをとらえることはできていない。

Z児は、鮮度を保つための漁業関係者の取組について感想を書いていた。その取組は、「漁師さんたちがもうけるためにしているんだ」ということも書かれていた。Z児は、漁業関係者の取組を漁業関係者の生活とかかわらせてとらえているので、分析的知識まで獲得できていると分析した。

このように、児童の学習時間毎のウエビングや学習後の感想の内容を分析した結果、本研究の成果と課題がいくつか見えてきたので、それらを以下にまとめてみた。

V 研究のまとめ

1 身近な地域素材を教材化した体験的な学習について

今回の検証授業で、児童は実感を伴って知識を獲得することができたと思う。それは、前述の児童の感想を読むと、観察や調査・見学などの活動を通して、働く人の取組、魚介類の大きさや種類の多さにびっくりしていることが分かったからである。鯨ヶ沢町産の魚介類を食したり、施設等を見学したり、漁業に従事している人々にインタビューしたりするような体験的な活動を取り入れたことにより、頭の中だけで事象をとらえさせるのではなく、体験をもとに実感を伴って事象をとらえさせることができた。また、児童が主体的に学習に取り組んでいる態度も見られたことから、身近な地域素材を教材化した体験的な学習を展開したことは、興味や関心及び問題意識を高め、実感を伴って社会的事象をとらえさせるための有効な手だてになったと考える。

2 知識の構造化について

小単元の目標に迫るために、知識を構造化し、学習内容にかかわる様々な知識の関連性を教師自身が事前に整理して指導をした結果、以前に比べて、児童に社会的事象の因果関係や社会的事象のもつ法則性をとらえさせることができるようになった。また、知識の関連性を整理できたことにより、児童が一単位時間の中でどのレベルの知識まで獲得できたのかを的確に評価することができ、次への指導に生かすことができた。

以上のことから、知識を構造化して指導したことは、社会的事象の相互の因果関係や社会的事象のもつ法則性をとらえさせるための有効な手だてになったと考える。

3 ウェビングの効果的な活用について

児童一人一人のウェビングの内容から、その変容を分析してみた。例えば、前述のある児童の第3時のウェビング(図5)からは、どの季節にどんな魚介類がとれるのかを記述しただけで、そこから何が見えてくるのかをとらえていないことが分かる。しかし、第5時(図6)では、漁業者が少なくなっているという事実から「漁業者の生活が安定しない→大変だ」や「もうからない」などのように、見えなかったことを自分の言葉で関連付けている。

第9時(図8)では、「山に木を植える」、「35cm以下は海に返す」、「イカを釣るときに電気をつける」という記述的知識を関連付けることはできなかった。しかし、第10時(図9)では、「魚をとってはいけない場所をつくる」、「海の中でち魚のすみかを作る」、「ち魚が成長する時期は魚をとることを禁止する」という記述的知識を関連付けることができただけでなく、「魚が増える工夫」という下位分析的知識との関連性も考えることができた。

さらに、学習後のウェビングを見ると、「放流」、「魚のすみかをつくる」、「木を植える」などいくつかの記述的知識に、「魚を増やす工夫」という下位分析的知識を関連付けることができていた。この学習後のウェビングを学習前のウェビングと比較すると、この小単元において、この児童が知識を関連付けながら上位の知識を獲得することができるようになったことがもっとよく分かった。

次に、ウェビングについて書いてある2名の児童の感想内容を分析してみた。

- ・ウェビングは、文で書くよりも分かりやすく、ぎ問などもうかんできました。そして、学習していく上で、毎日のウェビングが分かり、社会が楽しくなりました。
- ・ウェビングをしてみると、知らなかった事がだんだん分かってきたし、どういう関係なのか、どういうつながりがあるのかなど勉強する前とでは、分かったことがすごく多くなりました。

これらの感想の内容から、図解方式のウェビングは、児童にとって、ある程度長い文章で書くような通常

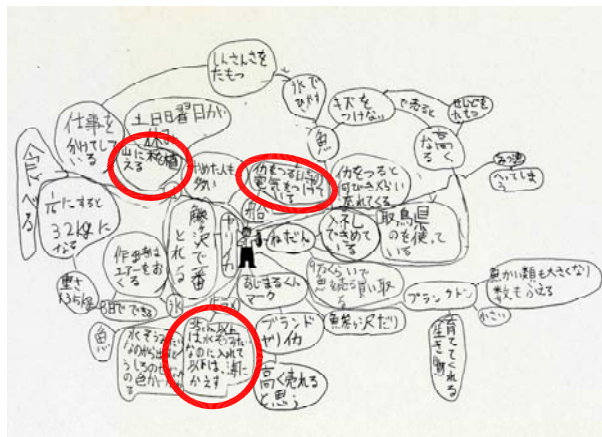


図8 第9時のウェビング

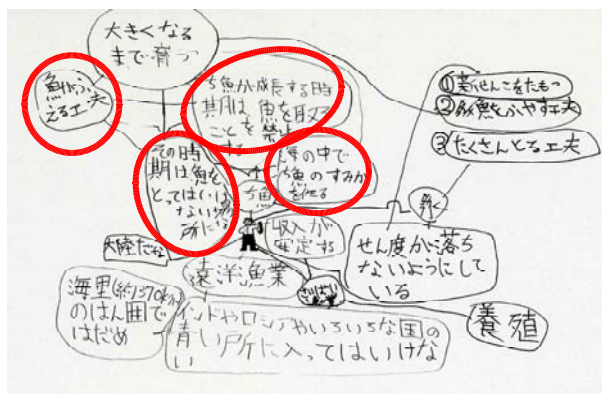


図9 第10時のウェビング

のノートへのまとめ方よりも、学習内容の全体像を視覚的にとらえやすく、また、自分の思いや考えなども関連付けやすいということが分かった。また、前述の児童のウェビング内容を分析した結果、ウェビングを取り入れた授業を継続したことにより、調べた事実や事象を相互に関連付けながら、水産業という社会的現象のもつ役割や価値をとらさせることができた。

以上のことから、ウェビングを取り入れたことは、事実や事象及び自分の思いや考えなどを相互に関連付けながら、社会的現象の意味をとらえさせるための有効な手だてになったと考える。

4 個人で関連付けた内容をもとに集団思考をする場の設定について

個人で関連付けたものをより深めさせるために、小グループまたは全体で互いの調べや考えを話し合う場を設け、個人の作業だけでは関連付けできなかった部分を、自分のウェビングに赤い線と赤い字で補足や訂正をさせた。その結果、目標にかかわる知識をとらえきれなかった児童が、他の児童のウェビング内容について考えながら、その時間の目標にかかわる知識を獲得していくことができた。もし、集団思考をする場がなかったら、断片的な知識の獲得だけで終わってしまう児童が多かったと考える。

以上のことから、集団思考をする場を設定したことは、考えを再構築させ、社会的現象をより深くとらえさせるための有効な手だてになったと考える。

VI 本研究における課題

1 身近な地域素材を教材化した体験的な学習について

本研究では、観察や調査・見学などの活動及びビデオレターなどの活用を通して、体験的に学習させ、実感を伴って事象をとらえさせることができた。今後は、そのような直接体験のほかにロールプレイング（役割演技）の要素も取り入れた授業の構想を考えていきたい。今回の検証授業の内容をもとに考えると、児童が、漁師、消費者、水産物輸入業者などの役割を担い、意見を交わし合うという学習展開が考えられる。児童がある人物の立場に立って、事実を調べ、まとめ、意見交換することによって、水産業という事象をもっと広い視野で考え、より深くとらえることができるのではないかと考える。

2 知識の構造化について

本研究の指導過程に、「日本の水産資源を守るために、どのような方法があるのだろうか。」というテーマで、自己の意志決定をする場を設定した。その結果、獲得した知識の中から自分の考えとしてふさわしいものを選び、それを書いたり発表したりすることができた。しかし、獲得した知識から根拠をしっかりと見出しながら、自分なりの考えをもつことはできなかった。

そこで、「輸入水産物が日本の漁業に与える影響」にかかわる知識だけでなく、「安い輸入水産物は消費者からの需要が多い」「日本産の水産物は値段が高くて、消費者からの需要が少ない」などの知識も構造化するなど、意志決定にかかわる学習問題の分析及びその答えとなる知識の構造化をもっと深く行っていく必要があると考える。

3 ウェビングの効果的な活用について

調べる、まとめる、話し合う、の三つの活動を1サイクルとする授業を展開しようとしたが、ウェビングを完成させるまでに予想以上の時間を費やしてしまい、話し合ったり、児童の発言を十分に上げたりする時間が不足してしまった。そこで、ウェビングの仕方をしっかり指導すること、いくつかの単元を通して継続的にウェビングに取り組みせて慣れさせること、ウェビングをする時間を教師が計画的に設定することなども、今後考慮していきたいと考える。

<参考文献>

- 青森県教育委員会 2006 2007 「学習状況調査実施報告書」
- 長谷川正 1990 「地域教材の開発を通して社会認識を育てる授業の創造」 東洋館出版社
- 岩田一彦 1991 「社会科の授業設計」 東京書籍
- 岩田一彦 2001 「社会科固有の授業理論30の提言」 明治図書
- 加藤幸次 1997 「総合学習の思想と技術」 明治図書
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2005 「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査質問紙調査集計結果－社会－」
- 文部科学省 1999 「小学校学習指導要領解説社会編」 日本文教出版
- 文部科学省 2006 「読解力向上に関する指導資料 -PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向-」
- 關浩和 2002 「ウェビング法」 明治図書
- 谷川彰英・長谷川康男 1993 「『お寿司一人前』で日本の水産業がわかる」 明治図書

